



～もっと地域と もっと地域へ～

かがやくえがお

【学校教育目標】夢をもち、ふるさとを愛し、自ら未来を切り拓く児童の育成

第17号

令和8年 7月17日
長崎市立小島小学校
校長 桐山 充晴

被爆体験講話

一昨日、八木道子様を講師にお迎えして、「被爆体験講話」を開催しました。
当初、教育週間中の6月24日に予定していましたが、大雨のため臨時休業となり延期していました。

1年生から6年生までの全校の子供たちを対象とした講演会でしたが、長時間にもかかわらず、低学年もしっかりと最後まで傾聴することができました。

八木先生は、原子爆弾投下当時6歳、小学校1年生のときに、鳴滝町というところにある御自身の家に、お兄さん、お姉さん、弟の5人でいるときに被爆されました。その時の空の色や、原子爆弾の被害を受けた多くの人たちの様子は、今も忘れられないとおっしゃいます。そんな大変な苦しみや悲しみを乗り越え、小学校の先生となり、多くの小学生に戦争の悲惨さやその時の辛さを伝えてこられました。小学校の先生を御退職されてからは、現在も、「二度とこのような悲劇を繰り返してはならない」「世界中の子供たちに平和な未来を届けたい」という強い思いから、全国の、そして世界の人々へ向けて、御自身の体験を伝える活動を続けられています。

八木先生は、「長崎を最後の被爆地に」との思いで、「今日みんなにバトンを渡しに来ました」とおっしゃいました。今回のように、体験された方から直接お話を聴くことができる機会は、これから先、とても貴重なものになっていきます。今日渡された「平和のバトン」を、私たちはしっかりと受け取る責任があると感じました。

平和祈念集会の登校日もありますが、ぜひ御家庭での話題にさせていただくとありがたいと思います。



八木 道子
(やぎ みちこ)
6歳の時に鳴滝町で被爆
元小学校教諭
「被爆語り部」として活動中



夏休みだからこそ「考動」を

今日は1学期の終業式でした。およそ4か月間の1学期でしたが、皆様の御協力によりここまでたどり着きました。

さて、『仏様の指』という寓話があります。いつも心に刻んでいる話です。

あるとき、仏様が道ばたに立っていらっしゃった。すると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。しかし、大変なぬかるみにはまってしまい、懸命に引いても車は動かない。汗びっしょりになって男は苦しんでいた。

その様子をしばらく見ていらっしゃった仏様は、ちょっと指でその車にお触れになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いていった。

目指す教師像（大人の姿）はこの姿です。この男性は仏の指の力添えがあったことを知りません。自分が努力して成し遂げたという自信と喜びとで、そのあとも車を引いて行ったと想像できます。もし仏様が手伝ったことを知れば、男性は「ありがとうございました。」と頭を下げてまた同じように荷車を引いて行ったと思います。感謝の気持ちを持ちながら・・・

でも「自分の努力により勝ち得た、学び得た喜び」は得られなかったのではと思います。毎日学校では様々な学びが繰り返されており、喜びや努力とともに子供たちの心に刻まれています。子供が教材に向き合って、努力格闘する姿を見守りながら、気付かれることのないようにそっと指を添え、「子供たち自身の力」で教材をものにさせていく。それが「授業の核」だと思っています。

情景や気持ちが子供の学びを強くします。これから始まる夏休み、どうか何事も周りがすぐに助けるのではなく、子供の気持ちや努力を見守り、さりげなく指で触れる程度のサポートができるように、子供たちを見守っていただければと思います。

